玉虫厨子制作年代考（五）

――中国上代仏龕史より見た玉虫厨子の様式年代について――

上原和

一、六朝石窟に見られる屋形龕と覆斗形龕

さきに、私は、玉虫厨子の仏龕形式を、主として、その信仰形態との関連のもとに、検討し、玉虫厨子造像年代解明の緒口となした。その際、私が、最も重視したのは、玉虫厨子龕内の周壁に貼付された、押出千仏像の様式年代への問いであった。従つて、問題の検討は、仏龕形式とはいえ、すべて龕内の荘厳意匠にのみ限定された。それ故、本稿においては、既稿において未だ果すことのなかつた、玉虫厨子の仏龕の外観形式の検討より、まず稿を起してゆきたいと思う。

さて、玉虫厨子の外観形式についてであるが、その仏龕形式の最たる特徴は、云うまでもなく、宮殿様建築を模した屋根型の屋蓋形式（屋形龕）である。しかも、こうした玉虫厨子龕形の屋形龕としての特徴は、橘夫人厨子の、所謂、箱型天蓋形式と比較されるときに、一層顕著に、認知されうる筈である。それ故、しばらく、橘夫人厨子との龕形比較の上に立ちながら、玉虫厨子仏龕の外観形式に見る諸特徴を、様式史的観点より検討してゆくことにする。

まず、その様式史的解明の比較的容易な、橘夫人厨子の箱型天蓋形式についてであるが、橘夫人厨子のこの龕形の形式的特徴が、法隆寺金堂内の天蓋の形式に共通するものであることは、容易に伺われうるところである。法隆寺金堂内の三つの同形式の天蓋のうち、東に懸つているものは、その銘文よりして、天福元年（一二三三）ころ、他二つを模して造られたものであることが明らかであるが、中央と西に懸つている天蓋の製作年代は、両者間に多少の年代差はあつたとしても、いづれも、金堂の再建年代と大略時期を同じくするものと考えられるので（註一）、法隆寺金堂内の箱型天蓋に見る形式的特徴を、この時代に特有の様式的特徴と見做し、もつて法隆寺系建築の様式的特徴の一つと見ることも出来るわけで

ある。なお、法隆寺金堂内の箱型天蓋を、かように法隆寺系建築の一特徴に数えて、積極的に法隆寺系建築の様式年代解明の資とされたのは、村田治郎博士をもつて、嚆矢とするであろう（註二）。

中国大陸では、こうした箱型天蓋は、何時ごろから始まつたのであろうか。村田博士は、つとに、箱型天蓋の流行を北魏より隋に至る間とし、その極盛を北斉ころと目していられるのであるが、現在利用し得る遺例の範囲では、この北斉時代の作例が、法隆寺の天蓋に最も近い表現をとつているものと、指摘していられる（註三）。事実、我々は、北斉における響堂山石窟において、即ち、南響堂山の第一洞、第二洞方柱正面龕、第五洞三壁の龕及び北響堂山唐邕経碑の龕に、こうした法隆寺様とも称すべき箱型天蓋に、最も近い作例を見ることが出来る筈である（註四）。

なお、ここで注目すべきことは、かように法隆寺の天蓋に最も近い表現をとつているものと目されている、この北斉における響堂山石窟の遺例において、箱型天蓋を有するこの種の仏龕（覆斗形、帷幕、華飾とからなる斗帳形式を示している）は、その龕形の構成において、最も緊密であり、また、その天蓋の装飾、最も華麗であり、箱型天蓋形としては、まさしくその絶頂を示しえているという点についてである。爛熟は、すでに衰退の兆を胚胎する。即ち、ここにようやく新たな天蓋形式への転換が予兆されてくる。例えば法隆寺金堂壁画において見られるような、もはや板製の箱型ではない、主として布製による曲線的輪郭の天蓋、所謂、「きぬがさ」型天蓋が、すでに、この北斉時代において、はやくも現われてきているのである。かくして、次の隋・初唐の天蓋形式の交替期を経て、やがて唐代におけるきぬがさ天蓋の盛行時代を迎えることになるのであるが、この点について、村田治郎博士も、最近著において次のように述べていられる（註五）。

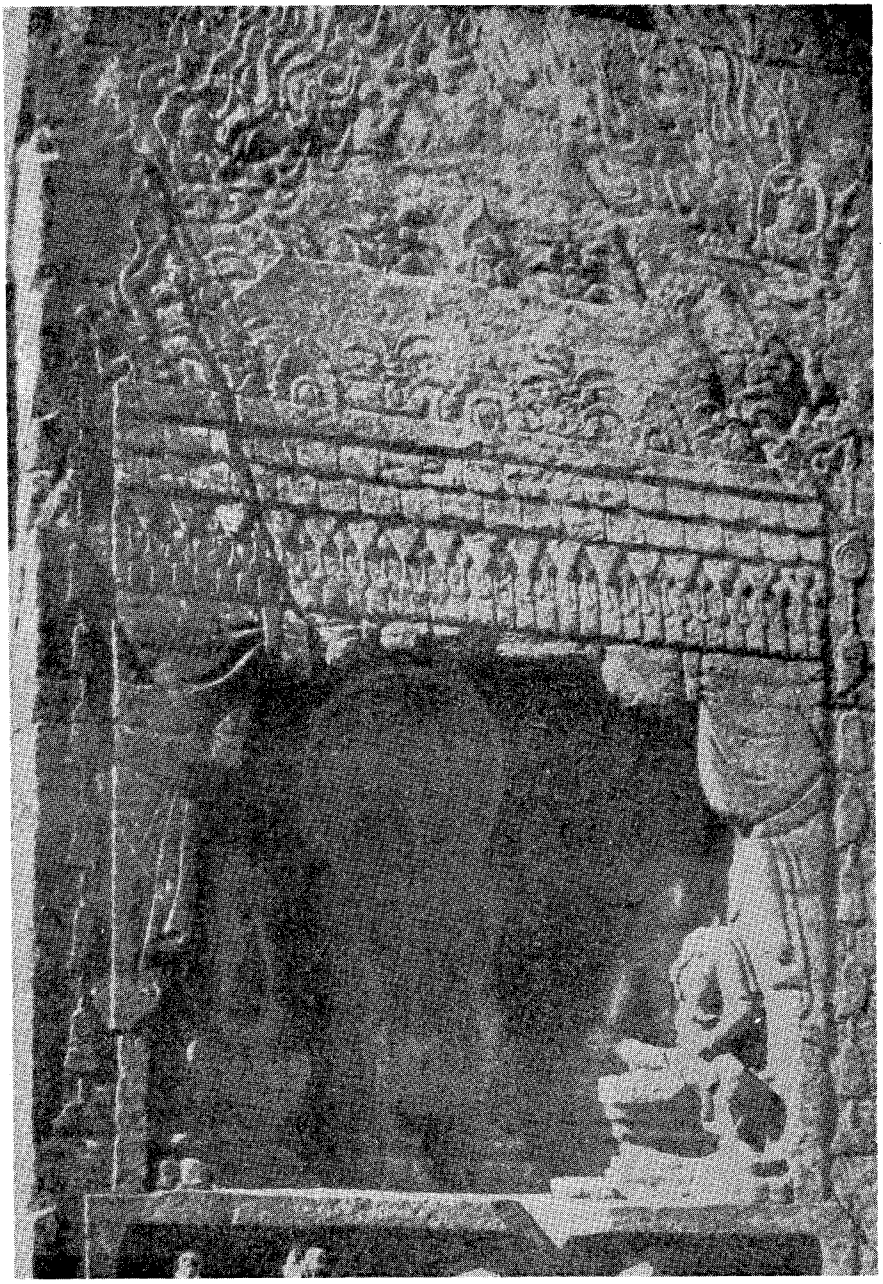
「中国ではすわつたり寝ることのできる牀の四すみに柱を立てて、その上に板製の天蓋形をのせたのち、上から斗帳をかける風が漢代からあつた。このうちの上部のものだけを天井からつれば天蓋である。北魏の雲岡石窟や竜門石窟における浮彫に、そんな天蓋や牀があらわれ、とくに後者は仏像をまつる厨子として利用されている。同じ傾向は東魏や北斉のような南北朝末期の石窟などの浮彫にもみることができ、板製の箱形天蓋は隋ころまでの作にあらわれるが、やがて布を主体とした天蓋（きぬがさ）に変つてしまう。そのような「きぬがさ」型は北斉ころの仏教美術にあらわれて、唐代に全盛をきわめたのであつた。したがつて法隆寺金堂の天蓋は中国でも古式の系統であるから、飛鳥様式でもまた現存のものに近い天蓋だつたに相違なかろう。」（傍点筆者）

しかし、この御説の結論には疑義が残る。即ち、北魏の雲岡石窟や竜門石窟における浮彫に、法隆寺金堂の天蓋とその系統を同じくする箱型天蓋形が見られ、とくに北斉の響堂山石窟において、その著しい好例に接しうることは、これまで伊東忠太博士をはじめとする諸先学によつて、つとに紹介さ

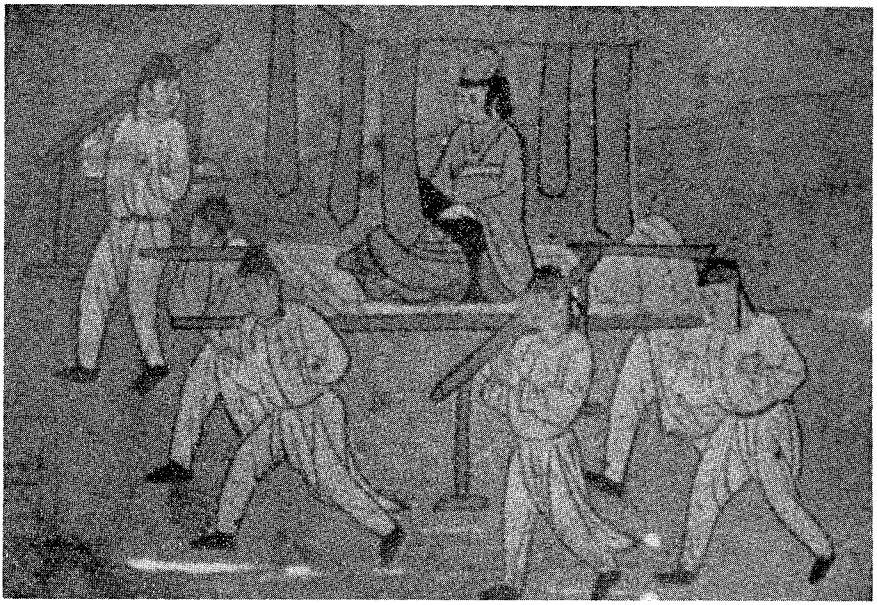
れ（註六）、すでに一般周知のところであり、いまさらに疑義をはさむ余地はないように思われる。しかし、それをもつて、直ちに、村田博士の云われるように、法隆寺金堂の天蓋は中国でも古式の系統であるから、飛鳥様式でもまた現存のものに近い天蓋だつたに相違なかろう、と結論を下しうるものか否かについては、なお疑問なしとしない筈である。

法隆寺金堂の天蓋は、たしかに、系統的には、その原型を容易に、北魏の雲岡、竜門両石窟に求めることが出来るであろう。周知のように、法隆寺様の天蓋は、建築物の斗の形（箱形で下部を斜めに切つてある）を倒にした、所謂覆斗形であり、その覆斗形下部の方形周辺には、魚鱗形と鋸歯文が接し、さらにその下縁を垂布状の襞がとりまいているのであるが、こうした上部を斜めに切つた覆斗形箱型の形態は、すでに漢代において愛用され、厘蓋の類はすべて之に従い、槨室の如きも、その例を彩篋塚に見るように、構造上の必要というよりは、全く形のために、上部を斜形に造つており、当代における覆斗形盛行のほどが伺われるのである（註七）。漢代には坐臥の具として牀があり、牀の上に帳を張つたのであるが、その帳の張られた板製の蓋部も、また同様に当代盛行の覆斗形を示しえていたことは、十分に推察しうるところである。なおこの牀上に張られた帳は、その蓋形よりして斗帳と称されているのであるが、覆斗形天蓋に見られる装飾の意匠もまた、この漢代以来の斗帳の形式を継ぐものといえよう。こうした漢代以来の斗帳及び牀の形式が、龕形及びその装飾に転用されて、北魏以降の諸仏龕の意匠の上に現われてくることになるのである。

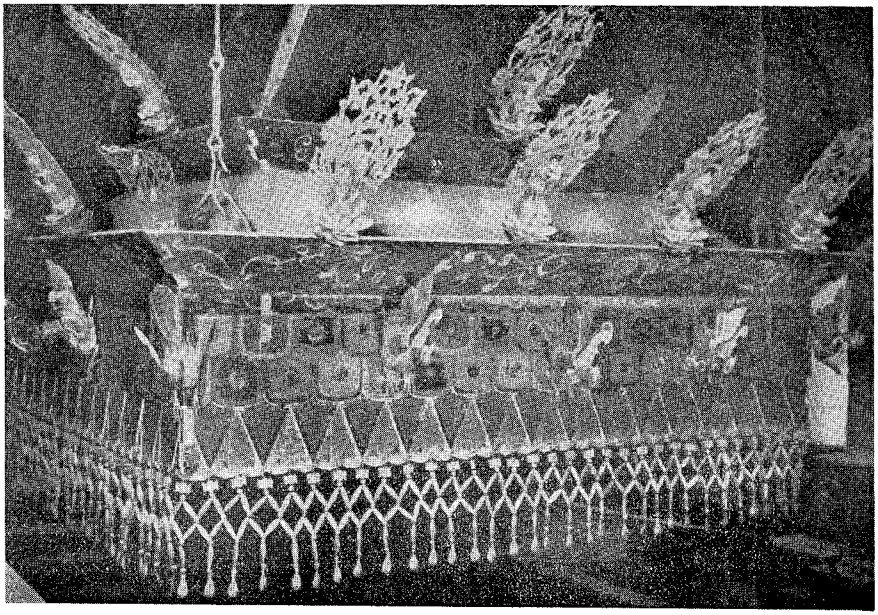
なおここで、法隆寺金堂のこの箱型天蓋形に関連して、識者の注意を喚起しておきたいのは、同天蓋が吊されている法隆寺金堂内陣の折上げ天井の形態もまた、さきに見た漢代以来の斗帳に由来する覆斗形の内側を模している点についてである。法隆寺金堂の内陣には、この斗帳に擬せられた覆斗形の折上げ天井の下に、牀に相当する須弥壇が身舎一杯に築かれているわけである。しかも、内陣四囲の柱の足元に残された釘穴等から察すると、元は柱の外面に框をめぐらした、現在より広い、木製仏壇が造られていたものと考えられるので（註八）、内陣四囲の柱は、丁度、斗帳を支えるべく牀上の四隅に立てられた柱の趣きを呈していたことになるのである。このように、身舎一杯に築かれた須弥壇というものは、その由来を、斗帳及び牀の形式に帰するほかには、恐らくは考えようがないように思われる。また、組入天井を高く持ち上げている支輪と支輪の間板には彩色の蓮唐文、天井組子間板には同じく彩色の蓮花文が、それぞれ白地に華麗に描かれているわけであるが、そこに見る彩色感覚は、むしろやわらかな布製にふさわしいものであり、もともと斗帳の内部装飾に由来したものと見て差支えないであろう。法隆寺金堂の内陣天井と、同天蓋の内部とが、形態的にも、装飾的にも、その外観形式を一つにしている点については、すでに周知のこととはいえ、決して見逃されてはならないように思う。



第一図　北斉北響堂山石窟唐邕経碑龕



第二図　敦煌唐画に見る覆斗形屋蓋の輿



第三図　法隆寺金堂天蓋に見る覆斗形

要するに、私は、法隆寺金堂にあつては、天蓋は勿論のこと、金堂の内陣自体も、その外観形式において、漢代以来の伝統的な、斗帳及び牀の形式を、鮮かに摂取しえていることに注目したいのである。橘夫人厨子の屋蓋もまた、そうした斗帳形式の仏龕に転用された一例に他ならないであろう。

処で、ここで、改めて注意しなければならないことがある。というのは、法隆寺金堂の内陣天井、同じく天蓋、及び橘夫人厨子の屋蓋に見る覆斗形の由来するところは、すでに見てきたように、たしかに、漢代以来の斗帳形式にあるわけであるが、しかし、我々が現に見る法隆寺金堂の内陣天井、天蓋、及び橘夫人厨子屋蓋それぞれの諸細部に見られる形式的特徴の様式年代は、様式史的には、かならずしも、六朝末期まで遡上りうるものではなく、むしろ隋・初唐の様式的特徴を示すものと見做してしかるべきものに思われるからである。すでに先学によつていわれてきたように、現在利用し得る遺例の範囲では、たしかに北斉時代の作例が、法隆寺の天蓋に最も近い表現をとつているものと目されうるであろうが、しかし、これは、あくまでも大略の外観形式の上から見た評言に過ぎない。いま、法隆寺の天蓋に酷似しているとされている北響堂山石窟の浮彫に見られる仏龕の覆斗形と、法隆寺の天蓋の覆斗形とを比較するときには、それぞれの外観形式においてさえ、かなり大きな差異があることに気がつく筈である。例えば法隆寺の天蓋の方には（橘夫人厨子屋蓋においても同様であるが）、覆斗形の斜面の上縁下縁にそれぞれ葺き返しが附いているのに対して、北響堂山石窟のそれには全く見当らないのである。しかるに、等しく北方系である敦煌の唐画中には、葺き返しのある覆斗形の屋蓋をもつ輿の絵が描かれているのを発見する（註九）。とすると、葺き返しのある覆斗形の出現は、唐代まで、少なくとも隋・初唐まで俟たなければならないことになる。これは、両者の外観形式から見ての顕著な相違であるが、もし、法隆寺の天蓋や橘夫人厨子と、北斉の遺例とを、さらに細部に至るまで詳しく（文様に至るまで）検討するならば、彼我の形式的特徴の相違は、なお一層著しくなる筈である。

処で私は、すでに既稿において（註一〇）、法隆寺系建築は、その形式的特徴よりして、明らかに白鳳様式に属する旨、繰返し述べてきたのであるが、その際、飛鳥様式を、朝鮮三国直模様式と見做し、他方白鳳様式を、新たな隋・初唐様式に加うるに飛鳥様式の和様化と目しておいた。と言うのは今日法隆寺系の建築様式を、その細部の形式的特徴より推して、北斉前後の様式に擬する見方が有力であるが、しかし細部個々の形式的特徴の中には、その源流を北斉乃至それ以前に遡上らしえても、そうした個々の形式的特徴が一時代の建築様式として綜合的に統括されるためには、やはり、隋・初唐まで俟たなければならなかつた筈だからである。つまり、現に法隆寺様式として示されている綜合的全貌を見るためには、隋・初唐より直接に、大陸の新様式が入つて来なければならなかつた筈である。北魏より北斉に至る六朝様式が、隋・初

唐の新時代の洗礼を浴びることなく、まつとうに日本に流入してくる手だては、天智朝における朝鮮三国の滅亡以降、全く失われていたのである。それにひきかえて、隋・初唐との彼我の交渉は、推古天皇一五年（六〇七）の遣隋使の派遣をもつて、すでに開始されていたことに留意したいと思う。特に、私が、ここであえて識者の注意を促しておきたいのは、法隆寺の再建された天武朝前後においては、すでに、初唐からは直接に新様式が入りえていたという歴史的現実についてである。なお、法隆寺建築における最も顕著な形式的特徴の一つは、高欄を支えている人字束であるが、元来、北魏においては直線的であつた扠首が、曲線的な人字束に、その形式が変容してゆくのは、北斉においてであるとしても、北斉遺例に見る人字束の曲線形と、法隆寺における人字束の曲線形とでは、その形式感情にかなりの相違が認められるのであり、法隆寺の人字束にきわめて近い例を見るためには、やはり隋及び唐の遺例に俟たなければならないという様式史的事実をも、この際併せて考えておきたいと思う。

なお、こうした法隆寺系の建築様式の中国における下限年代に関して、村田博士は（註一一）、

「法隆寺系様式が支那で存続し得べき最下限の時代はいつころであろうか。特色とする諸細部のうち唐代まで降し得るのは人字形の束のみであり、他はすべて隋代以前に属し、而もその人字形の束でさへ隋以前から存在してゐたのであるから、これを綜合して唐までは降し難く、むしろ隋代を最下限とする方がまだ穏かである。」

と述べていられるのであるが、私は、隋代と初唐との間には、さほど見るべき様式対立はないものと見做し、隋・初唐様式として一括し、これを盛唐様式に対蹠させておいたが、少くとも、日本上代美術の様式史的理解のために、大陸の様式史を照応する際には、隋代と初唐を区別することは、彼我の交渉史の上から見ても無意味にすぎるようである。何故ならば、推古期における微々たる日隋交渉の経過から見て、直接、隋の文物を移植するまでには至らなかつたであろうし、また、当代における朝鮮三国との密接な関係より見て、その必要もなかつた筈である。むしろ注目すべきは、早くも、舒明天皇二年（六三〇）には、第一回の遣唐使がすでに派遣されているという事実である。私は、やはり、日本上代美術の様式史的解明のために、中国の様式史が照応される場合には、隋・初唐の様式は一括して、様式史的区分がなされることが望ましいように思われる。それ故私は、綜合的な法隆寺系様式の中国における下限年代を、村田博士の云われるように、隋代を最下限と見做すことは、中国上代の建築様式史の上からも、また、日中上代交渉史の上からも、到底、賛同致しかねるのである。

要するに、私がここで一応はつきりさせておきたいことは、まず第一に、法隆寺系の建築様式の、中国における最下限年代は、初唐にまで下りうること、即ち、法隆寺系の建築様式は、隋・初唐様式と見做しうること、であり、したがつ

て、法隆寺系の斗帳様覆斗形もまた、即ち、金堂内陣の折上げ天井も、天蓋も、橘夫人厨子の屋蓋も、ともに、隋・初唐の様式的特徴を示すものと見做されてしかるべきものに思われるのである。（金堂の天蓋や、橘夫人厨子屋蓋に見られるような、履斗形の上縁下縁に張りめぐらされた葺き返しの出現は、その遺例を、唐画に俟たなければならないことは、すでに述べたところである。）それ故、さきに村田博士が述べていられた、法隆寺金堂の天蓋は中国でも古式の系統であるから、飛鳥様式でもまた現存のものに近い天蓋であったに相違なかろう、とする御説は成り立たないことになる。飛鳥様式は、すでに、私自身、繰返し述べてきているように、様式史的には、六朝の旧様式を温床する朝鮮三国の直模様式であり、隋・初唐様式の影響下にある白鳳様式に対して、はつきりした様式対立を有しているものと考えられるからである。

では、飛鳥様式における天蓋は、どのような様式的特徴を示していたものと、推定しうるであろうか。また、飛鳥時代においては、いかなる屋蓋の仏龕形式が、盛行を見ていたものと考えられるであろうか。しかし、今日その制作年代を、明確に飛鳥時代と証しうる遺品が現存しえていない以上、こうした考察は、当然のこととして、中国上代における仏龕形式の発展史の上に、その類推の手だてを求めなければならないことになる。

さてそこで、まず、雲岡石窟における北魏の仏龕形式が問題になるのであるが、水野清一氏は、雲岡石窟に見られる仏龕の二大形式として、尖栱龕と楣栱龕とを挙げていられる（註一二）。即ち、尖栱龕というのは、円弧状に彎曲した屋蓋の上に尖りアーチの額をつけた、所謂尖りアーチ龕であり、普通には、そのアーチ状の額部に過去仏の坐像が見られる。これに対して、楣栱龕の方は、梯形状に折上げた屋蓋の上額が框組みになつている、折上げアーチ龕であり、その框組みなかには、大低の場合、飛天が描かれている。こうした二様の龕形は、ともに印度にその起源をもつわけであるが（註一三）、雲岡では、雲岡独特の形式になりきつて、その後も上代中国の最も典型的な龕形として、六朝時代を通じて、広く、旺んに行われることになつたのである。

処で、ここで、あえて識者の注意を喚起しておきたいのは、こうした尖栱、楣栱両龕形とともに、雲岡石窟においては、木造建築の屋根形を模した、所謂屋形龕が盛行を見ているという点についてである。周知のように、雲岡石窟の最たる特色の一つは、窟中に、木造建築の諸意匠をふんだんに持ちこんだことであり、それは、塔洞とも称すべき、方柱仏塔を中心とした塔廟窟において、とくに著しいわけであるが、その場合、かならずしも、窟内の方柱塔のごとき、それ自身宮殿仏寺の外観を模した木造建築的構築物の上にのみ見られるわけではなく、窟内壁面の諸仏龕や壁間装飾の上にも、それぞれ顕著に見出されるところである。即ち、屋形龕はこうした状況下において出現した、インドには見られなかつた、まつたく中国特有の仏龕意匠であつたことに注目しておきた

いと思う。その意匠は、当時大同に立ち竝んだ仏寺堂塔の造構にかようものであり、漢魏以来の宮殿建築の伝統のを継ぐものといえよう。

雲岡石窟における、こうした窟内の建築的造構、乃至は壁面の屋形龕に見られる特徴については、後ほど詳述するとして、ここでは、そうした屋形龕のおよその時代的消長について、水野清一氏の次の報告を参照しておきたいと思う（註一四）。

「屋形龕は竜門時代にはなほつかはれたが、そのつぎの響堂山や天竜山の時代では石窟外の装飾にもちいられるのみで、いはゆる屋形龕はなくなつた。楣棋龕もまた流行をみたのは竜門までで、その後はこれももちいられぬやうになり、斉周隋時代にはおのづから尖棋龕のみになつた。」

たしかに、雲岡石窟において盛行を見た屋形龕は、竜門石窟においては、僅かに、北魏窟である賓陽洞や古陽洞、薬方洞、或いは蓮華洞などに、その遺例を見ることが出来るばかりであり、それも、雲岡石窟に見られるような壁龕としてではなく、尖棋龕などの周辺を荘厳する浮彫として、単に家屋形が描かれている場合が多いのであり、東西魏窟以降になると、もはや屋形龕は、竜門石窟からは、その姿を消し去るのである（註一五）。かくして、東西魏時代（535—550）を経た北周北斉時代（550—581）には少くとも、石窟における壁龕形としては、もはや屋形龕を、斉周窟、即ち、天竜山、響堂山の諸窟に見出すことは、著しく困難になる筈であり、すでに述べておいたように、この時代に最も盛行を見た龕形は、覆斗形の、所謂箱型天蓋形仏龕であり、加うるに、北魏以来の尖棋龕と楣棋龕とである。もつとも、このうち楣棋龕の方は、すでに北魏様の龕形は衰退し、前記の覆斗形仏龕に見られる帷幕棋との給合した形において、僅かに南響堂山の第七洞に認められるばかりである（註一六）。

なおここで興味をおぼえるのは、こうした北斉窟においてすでに、窟内の造構や窟内個々の龕形からは失われた木造建築の模倣が、こんどは石窟外景に及ぼされ、天竜山第一六洞外景や、南響堂山第七洞外景に見られるように（註一七）、石窟外景に屋形が施され、本瓦葺の軒先には、極から斗棋、そして列柱まで備わっているのである。屋形窟とも称すべき、こうした石窟外景の木造建築的造構は、すでに、竜門の唐字洞など北魏末の小窟において見られるところであるが、なんといつても、石窟の外景に屋形を施す、所謂屋形窟の典型としては、この響堂山の北斉窟の右に出るものはないように思われる。しかも、唐代の石窟においては、もはや、こうした北斉様の屋形窟は、再び見出されることがないのである（註一八）。即ち、石窟の外景に屋形を施す、こうした造窟形式は北斉において絶頂に達し、やがて唐代において消滅してゆくわけであるが、所謂屋形窟の、こうした時代的消長の在り方は、さきに述べておいた覆斗形仏龕のそれと軌を一つにしているのであり、ここに両者の相関性が自ら諒解されてくる筈である。

即ち、中国上代の石窟において、屋形龕が盛んに見られるのは、雲岡における北魏窟においてであり、その後、こうした屋形龕は、響堂山や天竜山の北斉窟において、窟内仏龕からはその姿を消し、かつて屋形龕において見られた木造建築の外観模倣は、北斉においては、石窟外景の造構に移され、窟内仏龕としては、屋形に代つて、覆斗形が、盛行を見ることになつたわけだが、そのように、仏龕形式が、屋形から覆斗形に推移してゆく、いわば龕形の形式変容の上に、我々は北魏から北斉に至る間の、造窟形式の変化をも、併せて見ることが出来るように思うのである。

では、雲岡から響堂山へと、北魏、北斉の造窟形式は、どのような変化を見せているのであろうか。まず第一に指摘されうることは、雲岡においては、その窟内空間は、仏の遍満する宇宙空間として表現され、従つて、宮殿建築形が、窟内の構造体として、或いは周壁の列龕として用いられるにせよ、何れも、それは、宇宙に遍満する仏の住居の荘厳的表現として、その荘麗な外観が模倣されたのである。これに対して、響堂山においては、すでに見てきたように、宮殿建築形の外観は、石窟外景において模倣され、窟内空間は、もつぱら、仏の日常坐臥の場として、室内空間として表現されることになつたのである。北斉に最も盛行を見た覆斗形仏龕の龕形が、もともと、坐臥のための斗帳附きの牀を模したものであることは、すでに述べたところであるが、こうして仏龕形が、はつきりと室内調度の形態をとつていることに注意したいのである。こうした仏龕の形態と、天竜山や響堂山の石窟において顕著な現われ方をしてくる造窟形式、即ち、各壁に一仏龕のみを開く各壁一龕制、或いは壁面に龕形を造らず、壁下の宝壇に尊像を安置する宝壇制とは、決して無関係ではない筈である。何れも、尊像の安置されてある形態であり、北魏における、仏の遍在する形態とでは、龕形のみならず造窟形式もまた、自ら異らざるをえないのである。

このように、中国上代石窟における造窟形式と、窟内龕形の相関性の上に立つて、龕形変容の跡をたどつてくると、少くとも窟内仏龕の龕形に関するかぎり、屋形龕と覆斗形龕とでは、どうしても、屋形の方が、覆斗形よりも、龕形としては先行形式であることは、もはや、動かし難いように思われるのである。

要するに、雲岡において盛行を見た屋形龕は、覆斗形龕流行の響堂山、天竜山においては、再び現われることがなかつたのである。問題を仏龕の外観形式にとどめた場合、屋形龕としての玉虫厨子と、覆斗形（箱型天蓋形）の橘天人厨子と何れが先行形式であるか、もはや論を俟つまでもないように思われる。

しかし、以上の推論は、あくまでも、中国上代の諸石窟の壁龕に現われた仏龕形式に拠つた、外観形式上の比較を出でないものである。次に、独立龕の遺例によつてなお検証し、併せて屋形龕としての玉虫厨子の細部様式の検討に及びたい。

（註一）法隆寺金堂における三つの天蓋の制作年代については、左を参照されたし。

福山敏男「法隆寺金堂の天蓋・須弥座・土壇・裳層・基壇について」（「夢殿」第十四冊続法隆寺研究　昭和一〇、一一、三〇）四二頁

福山敏男「金堂の天蓋」（「総観法隆寺」昭和二四、一〇、一）一九〇頁

（註二）村田治郎「支那建築史より見たる法隆寺系建築様式の年代」（「宝雲」第三十六冊　昭和二一、四、一）三六頁

（註三）前出　三七頁

（註四）水野清一・長広敏雄「響堂山石窟」昭和一二、九、一〇　八四頁

（註五）村田治郎「法隆寺の建築」（村田治郎・上野照夫共著「法隆寺」昭和三五、七、二〇）五六頁

（註六）伊東忠太「北清建築調査報告」（「建築雑誌」第百八十九号所載　明治三五、七）なおその後自著「東洋建築の研究（上）」（昭和一八、九、一〇）に転載。

また、同博士の、最も広く一般に読まれた「法隆寺」（昭和一五、一一、一五）一四二頁に、次のような記載が見えている。

「図らずも明治三十五年、私は支那留学中、北魏の遺跡である山西省雲岡の石窟寺及び河南省竜門の石窟寺等を訪ね、その石彫に法隆寺式の天蓋が存在してゐるのを発見して狂喜したのであつた。ところがその後又河南省武安県の北響堂山の石窟寺で、更に鮮明な法隆寺式天蓋の石彫が発見され、関野・常盤両博士共著の支那仏教史蹟図譜に公表されたのを見て歓喜措くところを知らないのである。そして、これをよく点検した結果を、法隆寺の天蓋と比較して見ると、殆んど寸分の相異が無いと云つても過言ではないと思ふ。北響堂山石窟寺は北斉の武平三年（西暦五七二年）に出来たもので、敏達天皇の元年に当り、竜門より後れること約百年、雲岡より後れること約百二三十年と見て大差は無いのである。」

（註七）飯田須賀斯「中国建築の日本建築に及ぼせる影響」（昭和二八、一〇、三〇）二九八頁

（註八）浅野清「法隆寺西院の建築」（「総観法隆寺」所収　昭和二四、一〇、一）六九頁

（註九）Stein. A.: The thousand Buddhas. Ancient Buddhist paintings from the cave-temples of Tun-Huang on the western frontier of China. 1921. Plate XXXVII.

（註一〇）拙稿「玉虫厨子制作年代考㈢　―建築的意匠より見た玉虫厨子の様式年代について―」（「成城文芸」二十号　昭和三四、一一、三〇）五六頁

（註一一）既出「支那建築史より見たる法隆寺系建築様式の年代」四一頁

（註一二）水野清一「雲岡石仏群」（昭和一九、六、一五）二三頁

（註一三）関野貞「西遊雑信　下　印度の仏教芸術に就て」（「支那の建築と芸術」所収　昭和一三、九、一〇）第三七四図タキシラ、ジョーリアン塔側出土の小塔、及び第四四八図ペルシャワル博物館蔵ガンダラ彫刻　参照。

この両図には、尖栱形、楣栱形両様の龕形が、それぞれ対照的に相竝んで見えている。なお、尖栱形の龕は、印度

特有の龕形として、すでに紀元前のストーパ欄楯の本生図や仏伝図にしばしば現われている。

（註一四）既出「雲岡石窟群」一〇〇頁

（註一五）水野清一・長広敏雄「竜門石窟の研究」昭和一六、九、二五。一三図、三三図、三六図、三七図、七六図、七九図、拓影五三図

（註一六）既出「響堂山石窟」八五頁

（註一七）同　四〇頁第二七図、図版二九

（註一八）水野清一氏は「響堂山石窟」八三頁において「響堂山の北斉窟は外景に屋形を施すものとしてもつとも徹底したものである。徹底しただけにこれが最後であつた。唐代では屋蓋を刻成したものは見ない。」旨、指摘していられる。なお、唐代石窟の例として、竜門の奉先寺洞が挙げられているわけであるが、この奉先寺洞内には、天井がなく、もともと諸尊像の上には、屋根がけがしてあつた痕跡が、今日残されているという。（既出「竜門石窟の研究」七五頁参照）

二、河北定興県北斉石柱上の屋形龕と玉虫厨子との様式比較

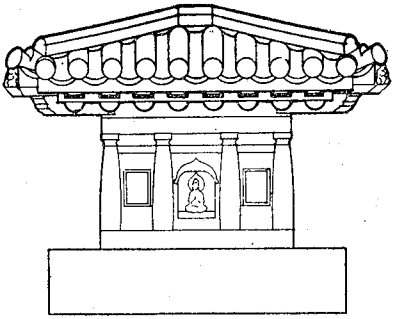
すでに見てきたように、北魏以来の六朝石窟において、壁龕として示される屋形は、北魏の雲岡石窟において最も盛んであり、北斉の響堂山石窟においてその消滅を見るのであるが、ではこうした屋形龕の消長は、石窟壁龕以外の独立龕の上には、どのように現われてきているであろうか。

限られた数少ない六朝遺品に徴して見ても、やはり、屋形が多く見られるのは、たしかに北魏、東西魏の諸例においてではあるが、しかし、北斉において、響堂山石窟同様の傾向が、即ち、屋形龕の全き消滅が、直ちに独立龕のすべてに及んでいるわけではない。もともと、石祠や明器における木造建築の模倣、即ち、屋形への好みは、漢代以来のいわば伝統的感覚ともいえるわけであり、響堂山において壁龕から屋形が消滅したのは、屋形が、窟内から洞口へ移されたからであり、屋形への好みは依然消滅していたわけではない。北斉の石窟壁龕以外の仏龕になお屋形を見るのは、あまりにも当然のことかも知れない。問題はむしろ、仏龕の屋形そのものが、北魏から北斉へと、時代的にどのように変化してきているか、その形式変容の仕方にある筈である。

ところで、ここに北斉における屋形独立龕の遺品として最も興味深いのは、河北省定興県下石柱村における北斉石柱上の石屋であろう。同遺品は、さきに民国二三年（一九三四）、劉敦楨氏によつて、中国営造学社彙刊第五巻第二期紙上に報告されたものであるが、氏は、そのなかで、この北斉石柱上の石造屋形龕を、玉蟲厨子と比較し、次のように述べているのは注目される（註一）。

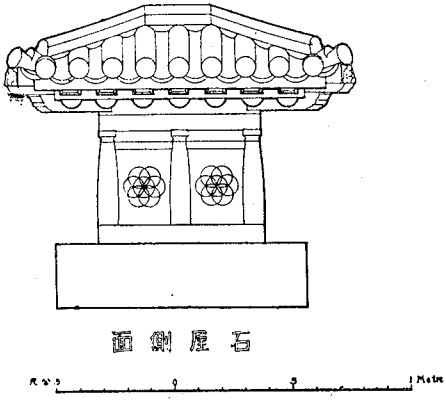
「其後復有日本法隆寺玉虫厨子、於方形高座上、置殿堂一座、供奉仏像、亦與此柱上部之佛龕、性質相類。」

劉氏の報告によれば、この石柱は、蓮華座上に立つ八角柱の頂上に、水平の蓋板をおき、その上に四注造の仏殿を載せ

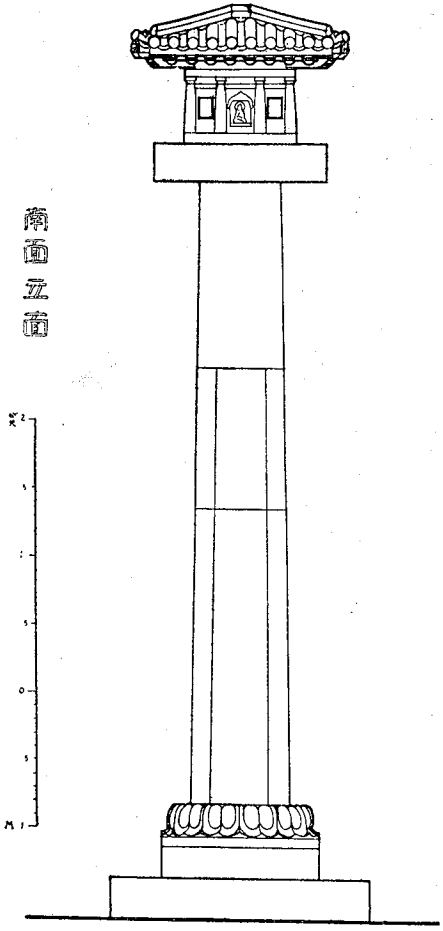


面正屋石

第二図　北斉石柱上石屋の正面図



第三図　北斉石柱上石屋の側面図



第一図　北斉石柱全図

た、石灰岩六枚重ねの総高六・七公尺（六・七メートル）の墓表であるが、その建立年代は、氏の綿密な石柱頌文と関係諸文献との照合考証によって、北斉天統四年（五六八）より武平元年（五七〇）に至る間に置かれている。石柱建立の由来は、石柱に刻まれた三千四百余言の頌文に余すところがないわけであるが、要するに、その起源は、北魏孝明帝孝昌元年（五二五）の杜葛文乱の乱定後に行われた義葬に基いているという。その義人たちの奉頌碑がこれである。この優美な石柱の建っている寒村も、かつては「残害村薄、屠戮城社、形骸曝露、聚作丘山」の惨状を見たこともあったのである。

さて、この「義慈恵石柱」とも頌称されている北斉石柱上に載せられている石屋、即ち屋形龕の細部を、玉虫厨子仏龕の細部と比較検討してゆくことになるのであるが、さきにまず指摘しておきたいことは、この北斉石柱上の石屋は、建立年代の明らかな、そして比較的良好に保存された、北斉の標準作であるということである。即ち、その形式的特徴は、十分に北斉様式の時代的特徴を示現しえているものと見做られうるのである。したがって、この北斉石柱上の石屋と玉虫厨子とが比較された場合、同じ屋形龕であるにも拘らず、そこに顕著な形式的特徴の相違がもし現われてきたとすれば、それは、明らかに、北斉様式に対する何らかの様式対立としてであることは、自明であり、その様式対立が、北斉の先行様式であるか、或いはそれの発展様式であるかを見究めることによって、北斉様式に対する玉虫厨子の様式史的位置を判断することは、かならずしも困難ではない筈である。なお因みに、この北斉石柱の武平元年（五七〇）は、日本の上代史では、欽明天皇三一年にあたるのであるが、玉虫厨子の様式は北斉様式に比べて、はたして旧新何れの様式に属するのであろうか。

まず、この北斉石柱上の石屋の外観とその主なる細部とを、劉氏の報告文と掲載図版の検討とによって述べておくと、石屋は、正面三間、側面二間の単層四注造の木造建築の模型であり、その屋頂は、長方形の露盤状の小台をなし（正面の方が側面より短い）、その真中に、かつての刹柱の安置か宝頂の設置をおもわせる円洞が見えている。即ち、この石屋においては、これまで六朝、唐代を通じて、普通四注造の屋頂には欠くことのなかった大棟両端の鴟尾、或いは大棟中央上の鳥形、三角飾形、火焔形等の装飾が無視され、その代りに、屋頂に小台を設けその上に相輪なり宝頂をおく、唐代盛行の宝形（方形）造の屋頂形式が採られているのである。

こうした北斉石柱の石屋に見る、いわば四注、宝形折衷の外観形式を、玉虫厨子の宮殿に見る錣葺の入母屋造の外観形式と比較するとともに様式細部の比較検討はしばらく措くとしても、はたしてそこに、同時代的な形式感情の一致を、容易に見出しうるものであろうか。

ところで、この北斉石屋の外観を、この屋頂形式とともにさらに印象づけることになるのは、柱の形状である。即ち、柱は、正面三間、側面二間のプランにしたがって、正面に四

本、側面に三本見えているわけであるが、すべては壁面に附着した円柱 engaged column であり、しかも強い entasis を示していることが注目される。劉氏も、日本の法隆寺を除けば、唐以前の遺構中に見入しうるエンタシスの円柱は、この北斉石屋の遺例以外には見当らぬとして、この北斉石屋の柱と、法隆寺の柱とを同系統に属するものと目している。

いま、この石屋の円柱の上下両端部の構造を検討してみると、たしかに法隆寺金堂の場合との符合が見られる。即ち、柱の上端部では、頭貫が柱の上部を貫通し、さらにその上に皿斗のある大斗を載せているし、また、柱の下端部は、列柱下の連絡構材をなしている基礎牆（foundation wall 状の）の上に直接立ち、礎石は、個々には置かれてはいないのである。なお、この列柱を下で受けている基礎牆の存在は、法隆寺金堂のみならず、玉虫厨子においても見られるところであるが、報告者の劉氏は、とくにこの点のみを強調して、北斉石屋と玉虫厨子とは完全な一致を見るものと目しているが、玉虫厨子の場合、この台上におかれる柱が、全部、角柱であることには何故か眼を覆つているようである。北斉石屋におけるこのエンタシスの円柱と、玉虫厨子宮殿における角柱との、外観上の相違はあまりにも明らかな筈である。しかも、玉虫厨子の場合、この角柱すべてが、玉虫の翅を伏せた透彫の飾金具で覆われているにおいておやである。

次に、軒の構造についてであるが、北斉石屋に見られる椎の形状とその配列は、所謂地円飛角の平行配列である。もつとも地椎の断面は完全な円形ではなく半円形をなし、また飛檐椎も、同様に完全な方形ではなく、扁平状の長方形をなしているが、これは石刻の肉づけの性質からくるものと見做しておいて、まず差支えないであろう。さきに見た石屋外側の円柱も、その断面はやはり半円形をなし、半肉彫的に壁面に附着していたのである。この北斉石屋の地円飛角二軒の平行配列に対して、法隆寺の建築が角椎一軒の平行配列、玉虫厨子は丸椎一軒の平行配列であるが、ここで一軒二軒の差、椎の断面形状の違いこそあれ、その配列法がとも平行配列である点は、これら三者に共通した特徴といえよう。

なお最後に、この北斉石屋の龕形と、壁面装飾とについて述べておくと、石屋正背面それぞれの中の間に、尖拱式壁龕が彫られ、その龕内に、方台に扶坐した尊像一躯が見えており、その左右の間には、各々一つの長方形の窓が壁面に浅く彫られているのを見る。また石屋の両側各二面には、窓はなく、全く同意匠の幾何形花紋がそれぞれ浮彫されているばかりである。これに対して、玉虫厨子宮殿においては、正面左右側面三面が開扉され、龕内には、内壁、扉背面、屋根裏面に至るまで、隅なく金銅押出千仏像が貼付され、扉表面には天王像、菩薩像、龕裏面には、霊鷲山図が描かれているわけであり、北斉石屋との意匠の相違はあまりにも明瞭である。

以上、私は、定興県北斉石柱上の屋形龕に見られる、主として外観形式上の諸特徴を、玉虫厨子のそれと比較しつつ述べてきたのであるが、では、この両者の間に著しく指摘され

た形式的特徴の相違乃至はその対立というものは、如何なる様式史的意味を有するものであろうか、次に相関的に検討してゆきたいと思う。

さて、これまで見てきた北斉石屋の外観上の主なる特徴を、玉虫厨子と対立するもののみ綜合的に挙げてみると、屋根は、屋頂に相輪或いは宝頂を載せる宝形造様の四注造であり、軒の構造は、地円飛角二軒の平行配列、柱はエンタシスの円柱、龕形は尖棋式壁龕、柱間壁面の装飾は窓形と幾何形花紋とである。すでに述べたように、この石屋の載つている河北定興県北斉石柱の建立年代は、劉敦楨氏の綿密な考証によつて、北斉の武平元年（五七〇）と目されている。したがつて、この石屋に見る如上の形式的特徴は、当然、北斉末の様式的特徴を示すものと目されてよいわけであるが、ここでとくに注意を促しておきたいことは、この石屋に見る、北斉様式としての形式的諸特徴は、それぞれ唐代にそのまま持ち越されるか、或いは唐代における発展的な形式変容を俟つてその盛行を見るかの何れかであり、その意味において、この北斉石屋の形式的諸特徴は、様式史的には北魏以来の旧様式の踏襲というよりは、むしろ、来るべき隋・初唐の新様式の先駆として位置づけられるという点である。

即ち、いま、北斉石屋の外観の印象を、恐らくは決定的にしていたものと思われる、かつて屋頂の露盤様の長方形小台に相輪或いは宝頂を載せた、四注造の宝形造様の屋根は、唐代における、屋頂に方形の露盤を置き、その上に相輪なり宝瓶形宝頂を載せる、典型的な宝形造の屋根にむかう、過渡的な先行様式ということが出来るであろう。唐代におけるこうした屋頂のある宝形造の例として、玄奘の作とされている長安慈恩寺の大雁塔（六五二）が最も有名であるが、我々は身近かに、法隆寺東院の夢殿、或いは栄山寺八角堂において、その好例を見出すことが出来る筈である。唐代そしてその唐代直模の奈良時代において、この種の宝形造が、仏寺の堂塔建築のみならず、仏龕の龕形意匠の上にも如何に用いられていたかは、天平神護三年（七六七）の東大寺阿弥陀院宝物悔過料資財帳に見えている八角宝殿や（註二）同じく宝亀十一年（七八〇）勘案の西大寺資財帳の六角漆殿などの（註三）記載例によつても十分に伺い知ることが出来るわけである。

なお私は、既稿において（註四）、この種の龕形をとくに宝殿形式と呼称し、天平十九年勘案の法隆寺大安寺両伽藍縁起并流記資財帳に見えている（註五）、宮殿像形式と、時代的に様式対立をなすものと指摘してきたのであるが、武平元年（五七〇）の北斉石屋の龕形は、様式的には、こうした宝殿形式の先駆をなすものと云いうるであろう。かくして我々は、唐代乃至は奈良時代において盛行をみることとなつた龕形、即ち宝殿形式の上限年代を、かようにして、この北斉石屋の建立年代にまで遡上らせることは、かならずしも不当ではないように思われる。

すると、ここで当然、奈良時代盛行のこの宝殿形式に、信仰形態上からも様式上からも年代の先行が考えられる玉虫厨

子様の宮殿像形式の、中国上代建築史における様式史的位置も、この宝殿形式の先駆をなす北斉石屋の建立年代よりは、十分に遡上りうるものと考えてしかるべきであろう。唐代様式の完全な先駆を、この北斉石屋に見るという事例は、この石屋の、地円飛角の二軒の平行配列という軒の構造形式の上に、まことに典型的に見出されうるのである。しかも、ここで棰自体の形状について、さらに細い注意を払うならば、この北斉石屋の断面矩形の飛檐棰は、左右下三側面を殺ぎ、その先端が著しく細くなつているが、そうした飛檐棰の形状は、すでに述べた長安茲恩寺大雁塔毛彫仏殿軒図（註六）に見る唐代の飛檐棰のそれと全く等しいのである。こうした棰の形状の、細部的な比較に徴して見ても、この北斉石屋の棰の形状とその配列が、如何に唐代様式の完全な先駆として現われてきているか、あまりにも明白である。

しかし、他方、南響堂山石窟第七洞の洞口外壁に見えている屋形においては（註七）、全く同時代であるにも拘らず、その棰の形状は、旧様式のまま、一軒の丸棰にとどまつている。しかしここでなお注目すべきことは、この第七洞外壁の屋形にみる棰が、漢代以来踏襲されてきた、扇状配列を排して、新たに平行配列を示しえていることである。もつとも、洞口外壁に彫られたこの屋形は、屋根の上部及び両端部が壁中に埋もれているので、軒隅の配付を確かめることは出来ないのであるが、右方の端には垂直の降棟が見えているにも拘らず、その真下にある、軒隅に近い棰にさえも扇状に開く気配が全く見られないので、この屋形の棰の配列は、やはり平行配列を示すものと見做してよいように思われる。一体、北斉の響堂山石窟は、同時代の北斉石屋に比べると、北魏の雲岡石窟以来の、漢代的旧様式の要素を多分に残しているのであるが、やはりそこには、漸次的とはいえ、北斉石屋に見られるような唐代的新様式への移行がすでに準備されているのを見るわけであり、丸棰一軒の平行配列もまた、そうした例の一つといえよう。

ところで、ここで注意しなければならないことは、棰の配列形式の扇状から平行へという変化は、単に細部様式上の形式変容にとどまらず、実は、屋根全体の外観様式の変容を伴つているという点である。というより、もともと、漢代以来の一切直線的な屋根の外観に、曲線的なもの、即ち、軒反りや屋根断面の反りを求めるという視覚的な要請に応じて、その構造上の解決法として、棰の平行配列が試みられたのである。また、一軒から二軒へという軒構造の変化も、しよせん、この軒反りや屋根の反りをさらに助長するためのものであり、棰の扇状配列から平行配列へという形式変容は、やがて必然的に、一軒より二軒へという軒構造の形式変容をも伴わずにはいなかつたのである。

さて、我々は、かくして玉虫厨子に見る丸棰一軒の平行配列の、中国上代建築史における遺例を、偶々、このように北斉の響堂山石窟第七洞外景の屋形において見出すことになつたわけであるが、しかしこれをもつて、中国上代建築史上に

擬せられた玉虫厨子の様式年代を、いま直ちに、北斉に措定するとあれば、それはいささか早計にすぎると云わざるをえないであろう。何故ならば、すでに、竜門石窟古陽洞（推定北魏五〇〇―五一五）の洞内後壁の左脇侍上にある屋形龕において、やはり丸梼一軒の平行配列の軒構造を見出すことが出来るからである（註八）。この屋形龕は、四注造、軒下に斗栱と扠首とを有し、その斗栱の真中から雲肘木状のものがつき出ており、柱は八角柱であるが、この屋形龕で眼につくことは、そのすべてに華奢なつくりとその繊細感である。それ故、この古陽洞の屋形にかぎつて、本来、扇状配列として写すべき梼を、石工の不手際から、大雑把に平行配列としてしまつたということは、全く有りえないことと思われるのである。雲岡石窟にあつては、その屋形に見る梼の構造は、概ね丸梼一軒の扇状配列を示していたものとすれば、竜門石窟古陽洞の屋形に見出された平行梼は、恐らくは、梼の平行配列形式の上限を示すものと目されうるであろう。こう見てくると、丸梼一軒の平行配列という軒の構造形式から見た、玉虫厨子様式の上限年代を、北魏竜門時代にまで遡上らせることもかならずしも不当ではないように思われるのである。

さて、最後に、報告者劉氏によつても、とくに強調されている、この北斉石屋に見るエンタシスの円柱と、法隆寺の遺構のそれとの著しい形状酷似であるが、私は、両者の相似がひとり柱の形状のみにとどまらず、柱の上下端部の構造もまた、両者ともに同形式であることに、とくに注目したいのである。即ち、北斉石屋において、柱上端部の構造は、柱の上部を頭貫が貫通し、さらにその上に、皿斗附きの大斗を載せている点、また、柱下端部においても、柱は、列柱の連絡構材をなす基礎牆の上に立ち、個々の礎石を有しない点、法隆寺の場合と全く同様である。こう見てくると、柱の形状とその両端部の構造から見る、法隆寺建築の様式年代は、中国上代建築史の上では、当然この北斉の前後に擬せられてくるのであるが、すでに述べておいたように、この北斉石屋にみる様式を、唐代様式の先駆であると考えれば、法隆寺の様式年代は、この北斉を上限年代とする唐代様式の時代に擬せられてくることになる筈である。

私は、法隆寺の建築様式を、すでに既稿において繰返し述べてきたように（註九）、隋・初唐様式と朝鮮三国直模の飛鳥様式の和様化との混合と目しているのであるが、ここで見るように、法隆寺の建築の最も著しい形式的特徴であるエンタシスの円柱が、中国では、唐代様式の先駆ともいうべき北斉石屋においてはじめて見出されることは、法隆寺の建築様式が、綜合的には、初唐を遡上りえないことを、改めて確認させてくれるのである。このことは、北斉響堂山石窟内に見る覆斗形天蓋と、法隆寺系天蓋（法隆寺金堂の天蓋、橘夫人厨子屋蓋）との様式対立によつても、すでに示されえたところである。即ち、両者ともに漢代以来の斗帳及び牀の形式を模した、所謂箱型天蓋形であるが、しかし、法隆寺系の天蓋には、北斉石窟の天蓋形には見られない、敦煌の唐画を俟つて

はじめて現われる葺き返しが、その屋蓋についていることはすでに指摘したところである。

では、次に、北斉石屋と玉虫厨子の柱の形式的特徴とか比較される場合、両者には如何なる様式対立が存するであろうか。玉虫厨子も、法隆寺建築がそうであつたように、外壁の柱の上端部を頭貫が貫き、その上に皿斗つきの大斗が載つており、柱の下端部が、連結構材である基礎檐の上に置かれている点、北斉石屋の場合と同様であるが、玉虫厨子の方は、この他に頭貫に接してその上に、柱頭部の連絡構材である台輪を有するのである。この台輪は、もともと和様建築では、塔以外には見ないものである。しかし何といつても、両者の相違を決定的にしているのは、柱自身の形状である。即ち、北斉石屋のエンタシスの円柱に対して、玉虫厨子の場合はまぎれもない装飾角柱である。

大変不思議なことに、これまで、玉虫厨子の柱が、角柱であることは、玉虫厨子の様式を検討する場合にも、ほとんど無視されたままであつた。玉虫厨子が、これまで何ら疑われることもなく、法隆寺系建築に属するものとして考えられたのは、法隆寺建築のエンタシスの円柱と、見まがうべくもないほど明らかな形式的特徴の相違を示している筈の、玉虫厨子の角柱に気をとめなかつたことにもあつたようである。ではここで、北斉石屋のエンタシスの円柱と、玉虫厨子の装飾角柱との間にあるきわめて明確な形式的特徴の相違の上に、なんらかの対立が示されているとすれば、それは、一体如何なる様式史的な意味においてであろうか。

そこで、まず想起されるのは、雲岡石窟第九洞における、装飾角柱のある荘麗な宮殿形である（註一〇）。即ち、この洞の前室から主室に通ずる門には、木造建築を模した鴟尾のある四注造の宮殿形の門が全面華麗な装飾に覆われて構築されているが、門上の楣材と門側の角柱とには、幾通りもの唐草文の縁飾りが帯状にほどこされているのである。いま、雲岡、竜門両石窟に見る柱の形状について云えば（註一一）、雲岡では龕傍の柱は、方柱と八角柱、竜門では、八角柱と円柱とである。ここで八角柱は、雲岡、竜門両石窟を通じて現われることになるが、北斉の響堂山石窟に至つて、この八角柱は、柱の中ほどに蓮華を結びつけるという北斉独特の意匠を生むことになるのである。即ち、六朝石窟に見る限りでは、玉虫厨子様の装飾角柱は、雲岡以来では見られないわけである。また雲岡にあつて角柱を装飾していた唐草文様帯も、響堂山石窟にあつては、モチーフも新たに洞口側面飾と各仏像の光背飾として、意匠されているのを見るばかりである。

このように見てくると、北斉石屋と玉虫厨子との間に、一見、細部的に如何に共通する点を求めえたとしても、中国上代建築史の上に擬せられた玉虫厨子の様式年代を、北斉に措定することは、両者の柱の形状一つとりあげてみても、まことに困難といわざるをえないのである。玉虫厨子を、法隆寺系建築に属するものと見做す旧来の説も、北斉石柱上の石屋と玉虫厨子との様式検討を通して、さらに疑義が深められた

筈である。

（註一）劉敦楨「定興県北斉石柱」（「中国営造学社彙刊第五巻第二期　民国二三年　所収）一九三四、一二、四六頁
なお、この北斉石柱については、左の近著にも紹介されている。
中国科学院土木建築研究所編「中国建築」（一九五七、一二）第二四図叉慈恵石柱　河北定興　北斉
なお、両著の閲覧に便宜を計つて下さつた、先学小杉一雄氏にふかく謝意を述べたいと思う。

（註二）「大日本古文書」五　六七一頁

（註三）竹内理三篇「寧楽遺文」上巻（昭和一八、七、三〇）三九五頁

（註四）拙稿「玉虫厨子製作年代考（四）―仏龕形式より見た玉虫厨子の様式年代について―」（「成城文芸」二十六号　昭和三六、六、三〇）三六頁

（註五）既出「大日本古文書」二　五八一頁　六二六頁

（註六）須田須賀斯「中国建築の日本建築に及ぼせる影響」（昭和二八、一〇、三〇）図版二四参照

（註七）水野清一・長広敏雄「響堂山石窟」（昭和一二、九、一〇）図版二九

（註八）水野清一・長広敏雄「竜門石窟の研究」（昭和一六、九、二五）図版七六

（註九）拙稿「玉虫厨子制作年代考（三）―建築的意匠より見た玉虫厨子の様式年代について―」（「成城文芸」二十号　昭和三四、一一、三〇）五六頁

（註一〇）Sirén. O.; Chinese Sculpture, vol. 1, Pl. 36. Cave IX

（註一一）既出「竜門石窟の研究」一三二頁